

テーマ

# LGBT差別を考える

発行日

8月27日

発行者(氏名)

明桜中学校  
第1学年生徒

I このテーマの記事を選んだ理由を書いてください。

LGBTについては、東京レインボープライドという年一回のイベントについての記事や、同性カプルを公認する条例などを定めた区についての記事を読んで知っていた。

世間では偏見が減り、理解が進んでいるイメージであったが、今回の件があり、杉田議員はどんな目的で発言したのか、これによってどんな影響があるのか詳しく知りたかったから。

II 比べる記事のそれぞれの内容について分かったことを書いてください。

① ①についてLGBTへの理解増進法の議院立法の制定を公約している自民党の議員がこの様な差別的意見を述べたこと、そしてそれに対し自民党の見解も中途半端で、謝罪も撤回も求めず党としての謝罪もないこと。これでは多様性を認め合う社会実現を目指すと言っても形だけでも、もと真剣に具体的に議論すべきだ。

② ②について悪意がなかったとしても、日常の中にどれほど性的少数者への偏見や差別がはびこっているかということ。男女雇用機会均等法によって女性への差別がいけないという意識の共有につながったように、性的指向による差別禁止の法整備をして、多様性を認める社会、誰も傷つけない世の中にしていかなくてはならない。

①と②を比べて分かったこと、自分で調べてみたいこと。  
多様性を認め合う社会のためには、法律を整備することなどが必要である。実現するには政権を握る自民党が真剣に取り組むことは不決であり、またメディア、当事者、そしてぼくたちみんなが関心と理解と行動することが大切であるということ。

III テーマについて、自分の考えや他の人と交流をして気付いたこと、調べたこと、提案などを書いてください。

昨年新聞で、小学校教諭がLGBTの児童が在籍するクラスで「誰だオカマは」と差別的発言をしたという記事があったのを見て、出ず。不用意な発言で児童を傷付けた。奥底にある本心だ。たかも知れないし、悪気はなかったのかも知れない。だがこの記事にあたり、悪意の有無は差別かどうかとは無関係である。だから、ぼくたちは杉田議員の発言について何が間違っているかを考え、また当事者たちの訴えに真剣に耳を傾けなくてはならないと思う。「生産性」という言葉は、どんなカプルにと、重圧になるとぼくは考える。子どもも望まないと授けられない人など、全てに対する差別だ。人として生きていくことと、生産性は無関係である。そしてLGBT支援とは、特別な利益のことではなく、同じように平等にという内容であることをしっかりと理解したい。あるLGBTのマーケットが人権を伴うという発言を読んだ。ぼくは思った。例えば左利き専用のハシやゴルフクラブなど、マーケットになって初めて人権が得られるという側面があるということだ。政治家は法整備という側面から偏見や差別のない社会を作っていくべきだと感じる。ぼく自身多様性を認め合える柔軟性を持ち続けていきたい。